

享保の改革と享保の大飢饉

吉宗が享保の改革を始めたのは、享保元年(1716年)であった。吉宗は農民や武士階級のために、米価のつり上げを政策として実施し、当初は強力な支持を得た。しかし、その数年後、西日本で「いなご」の害から大凶作となり、米価は急騰(価格が急激に上がる)し、民衆は困窮した。そこで、吉宗は米商人に米を安く売らせ、幕府の米も放出して民衆を救済した。

ところが、享保17年(1732年)に、今度は「ウンカ」による大飢饉が発生する。飢饉の前ぶれとしての異常気象は、前年の冬から始まっていた。しかしこの享保17年(1732年)の春はとくにひどく、五、六月になるまで、長雨は昼も夜もシトシトと降り続いてやまず、いつまでもゾクツとする肌寒い日が続いた。

そして七、八月になると、近江(滋賀県)・伊勢(三重県)から、西日本一帯にウンカの大群が発生し、稲の実を食いあらした。

明るかった空は、まだ真昼だということに見る見るうちにまっ暗になった。空気は、何万というウンカのねのふれあう無気味な轟音に満たされた。ウンカの大群は、大雨のように降り落ちてくる。ひとたびウンカに襲われた田畑は、まるで冬の田畑のように、根こそぎ食い荒らされて何一つ残らなかった。

農薬による“複合汚染”が深刻な今日では、これらウンカの害は、ほとんど信じがたい。しかし、農薬を使用しなかった時代には、こうした天災があったのである。

西国のお大尽、百両握ったままの空腹死

この年、西国では道ばたで行き倒れて、そのまま餓死する者が続出したが、なかに一人の立派な男が衰れにも餓死していた。この男の着物はもちろん、腰の刀から小道具に至るまで、すべて美しい身なりで、普通人とはケタはずれに立派だったので、土地の役人が死体を調べてみると、百両という手かずの大金を首にかけたままであった。これは、餓死から逃れるため、食物を求め旅に出たどこかの大金持ちが、予期に反して、飢えをしのぐわずか茶碗一杯の飯さえ入らず

に、こうして大金を抱いたまま、あわれな死にざまをとげたのだと、前後の事情から推察されたという。

ひとたび飢饉になれば、大金を持っていたても、何の役にも立たないことを証明する話だ。これは、今日の我々の生活を考えるうえで、非常に重要なことを教えてくれているような話だと思う。



麦種を枕に餓死した四国の義農・作兵衛

同じ享保の飢饉の際の話で、別の餓死者の話を紹介しておこう。

この飢饉のなかで、伊予(現在の愛媛県)の百姓・作兵衛は、麦の種を一斗^{いっとう}貯えていた。しかし彼は、毎日の食物がつきても、この麦の種を食べようとはしなかった。そのため、まず作兵衛の父と長男とが餓死し、作兵衛自身もまさに餓死しようとした。人々はみな、作兵衛がこの麦種を食べて、餓死の危機を免れるよう、ロをそえて作兵衛にすすめた。

しかし作兵衛は、このみなのすすめを聞きいれないで言うには、「もとより百姓の大切な御田を預り、税を納め、国費の不足を補うものは、穀物の“種”である。いま、これを食いつくせば、郡中で、麦を蒔く種がなくなる。このことを考える

と、自分の命は軽く、麦の“種”は命より重い」といって、麦袋を枕としたまま餓死した。

作兵衛は死んだ。だが、一郡の人々は、後にこの麦の“種”を畑に蒔くことができ、生命を助けられた。

(以上、中島陽一郎『飢饉日本史』雄山閣 1989年 p.25~p.32から要約引用)

